The Journal of Shimonoseki University of Fisheries 39 (2・3) 119—131 (1991)

スポーツ集団にみられる日本的価値意識の再検討

小谷寛二・多々納秀雄*

Reconsideration of the Japanese Sense of the Value in Sports Groups

Kanji Kotani and Hideo Tatano*

It has been said that a preference for groupings, body and mental training marks the Japanese philosophy towards sports. It is based on so-called Japanology or "the Discussion of Japan's Uniqueness." By using episodes and terms available for emphasizing the uniqueness of Japanese sports and sports groups, Japanese attitudes towards sports have been compared with those of other countries. Instead, we tried international comparisons considering the histories, changes and sorts of samplings in order to reconsider the Japanese sense of the value in sports groups. The results are as follows. "Wa" or harmony has been bred through junior high and senior high school club activities. So-called Japanese uniqueness is more clearly shown in Korea than in Japan. The former West Germany and Japan have many traits in common regarding the approaches to sports.

1　スポーツ集団にみられる日本的価値

一般に，スポーツ集団における社会関係の成立基盤は，次の2点に求められる。

つまり，その第1は，欲求充足の実現を指向する個人間の相互作用にある。相互作用は，基本的には2人の人間が互いに触発し合い，各自の社会的行為を交換することを指し，その相互作用が継続することによって，1つのパターンができあがる。

もっとも，このパターン化の過程では，2人の行為間の期待が適合することが必須の要件であるが，実際には相手の行為と自己の行為の期待との間には若干のズレがある。そのズレが解消され，互いの期待にうまく適合した行為が常に交換されるようになった時，両者の間に社会関係が成立する。一般に，このような個人の欲求充足の実現を中心とした社会関係の締結の原理は，「契約の原理」に基づくと言われる。[1)]

一方，集団は，社会環境の中でこれに適応しつつ独自の機能的要件を充足する必要にせまられ，その達成を指向する。この特徴が社会関係の第2の側面である。つまり，集団の多くは，個人を越えて長く制度体として存続し，歴史的な時間の中でそれ自身の独自の生命をもち，それ自身の進化の過程を辿る。さらにこれらの集団の役割や制度は，システムの必要から割出されたものとして個人に課せられ

水産大学校研究業績　第1337号，1990年12月11日受付.
Contribution from Shimonoseki University of Fisheries, No.1337.　Received Dec. 11, 1990.
*九州大学健康科学センター（The Health Institute of Kyushu University）.

るものであり，個人はそれに自分を適応させなければならない。従って，個人は，集団の役割と自己の欲求に基づく目的充足が一致しなくとも，集団の成員として存続するかぎり，集団の機能的要件を充足するために，その役割行為を果たさなければならないとも言えよう。[2)]

仮に，前者の「契約の原理」を主体的社会関係，後者における機能要件充足の社会関係を客体的社会関係と呼ぶならば，日本社会論や日本人論，たとえば，タテ社会・甘え・家意識などを基礎とするこれまでの日本的スポーツ集団論では，対人関係を重視した「和」の概念に基づく間柄関係が強調されてきたが，この関係は，上記の意味で客体的社会関係の特徴を指摘したものと考えられよう。これは「契約の原理」に対して，地縁・血縁・社縁等の「縁約の原理」[3)]とも関係してくる。

ところで，「相手をおもんぱかる」ところのいわゆる「和」を中心とする日本的スポーツ集団では，集団の維持機能＝M機能と，集団の目標達成や課題解決に関与する機能＝P機能とを併せたPM機能[4)]が高いことで指摘されてきた。それは対人関係重視によるM機能が容易に受けいれられる一方，集団のP機能も社会システムの中で，負けられないチームの形成として，はじめから強く認識されることによるものであり，その特徴が今後も極めて重要であることは論をまたない。しかしながら，今日のスポーツ状況においては，私事化・個別化・即自化などをはじめとする価値意識の現代的変化を背景として，従来のような間柄中心の価値的一元性ではとらえられない様々の重要な変化が認められることも周知の通りである。そこで，主体的社会関係の台頭による日本的価値意識の現代的変化との関連で，日本的スポーツ集団の価値的特性の再検討を試みてみたい。特に，「日本らしさ」に含意されるスポーツ集団とその文化的特殊性をいくつかの国際比較をまじえて検討し，その特殊性を，現代の日本社会あるいはスポーツ集団の中で位置づけることを試みながら，それらの現代的意味を考え直してみたい。

2　日本的スポーツ集団の特性

従来，日本のスポーツ集団・スポーツ行動については，クラブといえどもチーム型であること，目的達成先行・集団エゴ・活動の画一性，自主性・主体性の脆弱性，排他的チーム・グループ主義，上一下級生の支配関係，儀式的な準備・整理運動，同一量のトレーニング，みんなで一緒の練習形態，さらには勝利主義・自虐主義，修養・鍛練主義，排他主義・求道主義・精神主義等々が指摘されてきた。これらは，いわゆる日本人論あるいは日本特殊論と密接な関連をもつものであるが，このような展開から「進んだ西欧ー遅れた日本」というスポーツに関する構図が画かれ，日本的スポーツの後進性が常套的に述べられてきた。これらの特性はすべて真であるのだろうか。また日本にだけあてはまるのだろうか。多々納[5)]は杉本[6)]の日本人論批判に依拠して，次のように従来の日本的スポーツ論を批判している。

1）　つまり，大松式バレーボール，自殺した長距離選手，「勝っては泣き，負けては泣き」等のバラバラの事例や，断片的な体験・事例を寄せ集めて「精神主義」に関する一般命題を提出する「エピソード主義」の誤り。

2）　根性，精神一倒何事か成らざらん，なせば成る，心身一如，諦めが肝心，判官びいき等々の言葉をテコに論を進める「言葉主義」の誤り。

3）　日本の高校野球・大相撲・プロ野球等々のエリート選手の現実と，諸外国のプレイ論的スポーツの理想との比較により，日本の後進性を指摘する「異質なサンプルやレベルの比較」の誤り。

4）　例えば，日本のスポーツは郷土や学校を代表する傾向が強いと主張される場合に，社会主義国のスポーツやアメリカの学校対抗試合にみられる同様の実態の無視，また欧米といえばあたかも各国が同一であるかの如く捉える「欧米一元論」・「同質同調論」の間違いに陥っていること，等々の問題点である。

このような多々納の指摘にみられるように，従来の考え方には奇妙な思い込み，特に日本的スポーツの特性・独特性に関する思い込みが存在したことは確かであろう。しかしながら，一方ですでに指摘した種々の諸特性が，事実としてしばしば論議されることも確かである。今後のわが国のスポーツ集団の在り方を再検討するために，筆者らが試みたいくつかの国際比較調査を手掛りとしながら，新たな視点から日本的スポーツの価値意識を考察してみたい。

3　日本的スポーツ集団は“日本的”か
――3種類の調査の結果から――

日本的スポーツ集団の価値意識について，以下3つの調査を基礎に若干の考察を試みたい。

1）日本的「和」の特性

1984年1～2月，中国・四国地区の公・私立の中学生・

高校生・大学生の運動部員2,800名を対象に，質問紙調査を郵送法により実施した。有効集計票は2,667部（95.25％）であったが，下記の結果はその１部である[7]。なお，ここでとりあげられた質問項目は，浜口[8]の間人主義的対人関係に関するモデルに立脚して，尺度を作成したものである。

表1　スポーツにおける「和」的価値意識

（「非常によくあてはまる」＋「かなりあてはまる」の％）

		全体	性別		学年別		
			男	女	中学	高校	大学
		N＝2,667	1,510	1,115	1,215	873	579
上下関係	①　自分の考えや意見があっても，先輩（せんぱい）やそのクラブの伝統的なやり方についつい従ってしまう。	59.9	56.1	65.1	55.1	61.7	67.5
	②　先輩になれば，技術指導だけでなく，いろいろな面で後輩のめんどうをみる雰囲気（ふんいき）があって，ついそのように行動してしまう。	57.4	58.6	56.1	52.6	55.3	73.0
	③　実力のある者が選手になるべきだが，チーム全体のことを考えると，技術が少し劣っているだけなら先輩の方をレギュラーにしたい。	41.4	38.6	44.3	50.5	36.4	28.5
ウチ意識	④　ベストをつくしても，試合に負けたら，指導者や応援してくれた人達についあやまってしまう。	48.2	41.6	56.8	45.9	46.9	53.4
	⑤　よく知っている者，またはチーム同志の試合では勝敗をあまりはっきりさせたくない。	38.0	33.6	43.9	42.6	37.2	29.7
	⑥　チームのレギュラーを決める時とか，親しいチームとの試合における，人助けのための八百長（やおちょう）（ごまかし）は認めたい。	10.7	11.0	10.3	13.9	9.5	5.7
家族的一体感	⑦　個人によって体力，技術の差はあっても，みんなといっしょに同じことを練習すると，一体感が味わえ，やる気がおこる。	70.1	69.2	71.3	69.9	69.9	73.0
	⑧　科学的，合理的な練習計画であっても，部員から不満が出たら計画を変更するようにしたい。	56.4	54.3	59.1	50.3	59.4	64.8
	⑨　勝つためには個人個人の高い技術レベルが必要なのであって，雰囲気的なチームワーク作りに気をつかう必要はない。	92.3	91.3	93.4	89.3	94.4	95.5

（自律性―〔他律性〕の軸は①④⑦，確定性―〔融通性〕の軸は②⑤⑧，普遍性―〔個別性〕の軸は③⑥⑨である。
ただし，⑨の％は「まったくあてはまらない」＋「あまりあてはまらない」の合計である。
〔　〕で囲んだ軸の方が「和」的価値意識に肯定的である。）

〈結果の概略〉——表1を参照にして——

一般的に，日本のスポーツ集団は「和」を重んじ，対人関係を重視することはしばしば指摘される通りである。つまり，人と人との間柄の「和」を尊び，互いに気を遣い，表面だった対立を避けようとし，規範に忠実で逸脱的行為を認めず，また，矛盾することを自分で処理したり，「イエス」，「ノー」をはっきり言わない集団である。協調的というより同調的であり，従って，自分の意見をどこまでも主張し，個人と個人の関係重視による民主的チーム・ワークには馴じまず，「情緒的」同調が常に背後にあり，自分と相手の間柄に依存し，相手次第ですべて決まってくるという特徴がある。これらの諸特徴が「和」について指摘されるが，このような主張について，中学・高校・大学生の運動部選手の日本的価値観をみたのが表1である。

（1）「和」の特性に関する一般的特徴

表1は「和」に関する価値意識を示す項目について，「非常によくあてはまる」と「かなりあてはまる」を合計した肯定率であるが，50％以上の肯定率は9項目中5項目である。相反する状況，建前論・正論を強調・喚起する項目を設定した割には肯定率は高いと言えよう。

（2）先輩・後輩の上下関係

「先輩やクラブの伝統に従ってしまう」が59.9％，「先輩になればいろんな面で後輩のめんどうをみる」が57.4％であり，実力主義が重視されるスポーツの場においても，41.1％の者が「先輩の方をレギュラーにしたい」と望んでいる。先輩・後輩の関係は日本特有の時間投資の差による上下関係といわれているが，クラブ運営，ミーティング，レギュラーの選出等々の面でも重要な要因となっていると言えよう。

（3）ソト―ウチ意識

「ベストを尽くしても負ければ……」48.2％の者が「ついあやまってしまう」とともに，ミウチに済まなく思う傾向が強い。さらにスポーツには勝敗が伴うが，「知っている者同志では勝敗をはっきりさせたくない」が38％と高い。なお，これらの結果はいずれも女子の方が肯定率において高くなっている。

（4）チーム・ワークの相乗効果

「一体感」・「部員のために計画の変更」・「雰囲気的チーム・ワーク」などが強く重視されているように，まずチーム・ワークが大切とみなされており，また，日本的「和」のもたらす練習・試合における相乗効果も期待され，科学的・合理的練習の追求だけでは済まされない日本のスポーツ集団の複雑さが看取される。近代化の2つの主張である個人主義と集団主義の問題がスポーツ集団においても今後の課題となろう。

（5）性差・学年差

9項目中6項目において女子の肯定率が高く，概して女子の方が「日本的」である。同時に，学年があがるにつれて肯定率も高くなる傾向があることから，これは，日本的「和」の外的環境との密接な関係性を示唆しているともいえよう。

以上の結果から，学校運動部員の一般的傾向として，先輩・後輩の上下関係を重視すること，個人差による体力・技術差があってもみんなと一緒にすることによってやる気が出ること，あるいは科学的・合理的練習であっても部員の顔色を見ながら進めなくてはならないこと，個人の高いチームプレー重視よりも雰囲気的チーム・ワーク作りが大切であること，等々について極めて肯定的な意識が指摘され，この結果から日本的「和」は文化のパターンとして深く定着しているものと推測されよう。このことは，学年があがるにつれて「和」に対する肯定率が高くなっていることから，日本のスポーツ集団は「和」を形成する構造があるということを物語っている。

2）日本・韓国のジュニア・スポーツ選手の意識・行動に関する比較

1985年8月，日・韓ジュニア交流競技大会出場の日本代表選手（インターハイ優勝選手），福岡代表選手，韓国代表選手の各々127名，合計381名を対象に質問紙調査を実施した[9]。有効回答は335名（有効回答率88％）であり，対象者の構成は表2のとおりである。

〈結果の概略〉

（1）練習の工夫・仕方の特性

表の3－1・2・3に示されるように，韓国は「準備・整理運動」を自ら進んで実施し，練習後は「個人の練習」を取り入れ，それらを「自分自身で工夫」し，さらに「科学的方法もかなり導入する」など，非常に積極的な姿勢である。これに対して日本は，「全員練習」・「伝統的方法」などの肯定率が高く，個人による練習への取り組み方は，かなり消極的でリーダー中心の練習計画となっている。

（2）クラブの人間関係，PM機能

表4に示されるように，両国ともに「上級生―下級生の関係」を強く感じており，特に女子では日本の方が「いつでも」7割の者が感じているのに対して，男子では韓国の

表2　対象者の構成

	男子			女子		
	日本	福岡	韓国	日本	福岡	韓国
サッカー	17	18	17	−	−	−
ラグビー	20	19	20	−	−	−
バスケット	11	12	12	14	13	11
ハンドボール	12	11	12	12	12	12
バドミントン	6	6	6	6	6	5
卓球	−	5	−		5	−
軟式テニス	−	2	6	5	2	6
硬式テニス	−	4	4	−	3	3
計	66	77	77	37	41	37

方が63.6%が「いつでも上級生－下級生の関係」を感じている。

次に，指導者の遂行する機能をみたのが図1である。集団の目的達成や課題解決に関する機能＝P機能と，集団の維持を目的とする機能＝M機能についてみると，男女ともに，日本がそれらの機能を高く評価しているが，特に女子のP機能が顕著である。女子の場合，韓国の指導者は項目番号1・3・6などM機能を中心として個人重視の傾向がみられるのに対して，日本の指導者は「近づきがたく」・「規則を重視」し、「目標達成」を指向した業績指向への指導者が多い。一方男子では，顕著な差ではないが，日本の方が維持機能重視型の指導に近い。

また，選手を試合の場に送り出すときに「幸運を祈る」という指導者の言葉は，韓国ではよく使われるのに対して，日本ではほとんど使用されていない。試合をする場にのぞんで、選手をリラックスさせるために「平常心」と，よく日本の指導者は口にするが，選手を信頼して「幸運を祈る」というよりも「ガンバレ」と，ついつい口に出してしまうのであろうか。

表3　練習内容の諸特性

表3－1　(%)

		男子			女子			有意差
		日本	福岡	韓国	日本	福岡	韓国	
練習のタイプ	自分で工夫	30.3	32.5	36.4	10.8	17.1	32.4	**
	仲間と工夫	25.8	23.4	15.6	18.9	31.4	2.7	
	計画に従う	28.8	36.4	40.3	70.3	46.3	56.8	
	考えない	12.1	7.8	5.2	0	2.4	8.1	
	その他	3.0	0	2.6	0	0	0	
練習後の疲労	非常に疲れる	21.2	42.9	45.5	29.7	22.0	40.5	**
	かなり疲れる	63.6	46.8	48.1	62.2	70.7	54.1	
	あまり疲れぬ	12.1	9.1	1.3	8.1	7.3	5.4	
	ほとんど疲れない	3.0	1.3	5.4	0	0	0	

** P＜0.1

表3－2 (%)

		男子			女子			有意差
		日本	福岡	韓国	日本	福岡	韓国	
練習の仕方	主に全員練習	47.0	49.4	21.1	78.4	63.4	18.9	**
	個人練習も入れる	19.7	15.6	14.3	13.5	29.3	21.6	
	後で個人練習	30.3	26.6	61.0	5.4	4.9	59.5	
	ほとんど個人練習	3.0	5.2	2.6	2.7	2.4	0	
科学的練習の導入	非常に科学的	1.5	2.6	1.3	0	2.4	5.4	**
	かなり科学的	7.6	26.0	37.7	8.1	9.8	48.6	
	どちらともいえぬ	37.9	36.4	40.3	13.5	31.7	13.5	
	かなり伝統的	28.8	16.9	15.6	64.9	36.6	10.8	
	伝統的	24.2	18.2	5.2	13.5	19.5	21.6	

** P＜0.1

表3－3 (%)

		男子			女子			有意差
		日本	福岡	韓国	日本	福岡	韓国	
練習後の評価	準備運動	42.5	49.4	58.5	75.7	43.9	59.5	**
	基礎技術練習	68.2	66.3	61.1	86.5	82.9	89.2	——
	ゲーム	68.2	45.5	59.7	81.0	41.4	67.6	——
	整理運動	18.2	15.6	26.0	27.0	31.7	16.2	**
準備・整理運動	自から進んで	39.4	35.1	57.1	48.6	61.0	62.2	*
	大切と思うがそう力を入れない	37.9	51.9	39.0	27.0	34.1	27.0	
	みんながしているから	13.6	11.7	2.6	18.9	2.4	10.8	
	あまりしない	9.0	1.3	1.3	5.4	2.4	0	

（評価は多いとする者の比率）** P＜0.1　* P＜0.5

表4　クラブ内の人間関係 (%)

		男子			女子		
		日本	福岡	韓国	日本	福岡	韓国
タテの人間関係	いつでも	45.5	50.6	63.6	67.6	70.7	37.8
	練習時のみ	19.7	16.9	16.3	16.2	12.2	10.8
	練習外のみ	22.7	24.7	15.6	8.1	12.2	51.4
	感じない	11.1	7.8	3.9	8.1	4.9	0

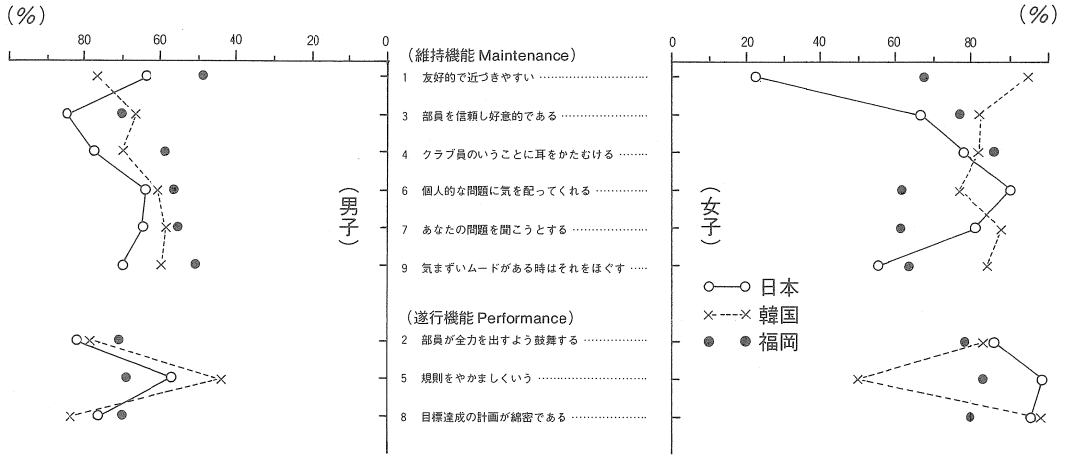

図1　クラブ指導者のP．M．機能
（%は「非常にあてはまる」と「かなりあてはまる」の合計）

（3）スポーツにみられる日本的価値意識

これまで日本人の価値意識として多くの特性が指摘され，日本人の特異性が強く指摘されてきたが，それらの諸特性がスポーツ場面でどの程度みられるかを示したものが図2，表5である。

結果的に言えば，日本以上に韓国の方が「日本的」であることが一目瞭然である。たとえば，表5から，韓国の「甘え意識」と「タテ社会意識」は著しく強く，日本が上回るのは「間人主義」―特に女子―と「恥・義理」―女子のみ―である。なおこの結果に加えて，間人主義の中の「対人関係本質視」・「相互信頼」において日本の方が高いことから，人間関係の重視が日本的価値の特性の1つとして示唆できよう。

表5　スポーツにおける日本的価値意識

		間人主義	甘え意識	恥／義理	タテ社会意識	パズルのソン変数	ウチ意識
男子	日本	3.72	3.38	3.68	3.67	2.74	3.16
	福岡	3.68	3.51	3.75	3.77	2.66	3.26
	韓国	3.63	3.87	3.83	4.14	2.75	3.35
	平均	3.67	3.60	3.76	3.87	2.72	3.26
	F値	－	＊＊	－	＊＊	－	－
女子	日本	4.04	3.50	4.06	4.04	2.56	3.05
	福岡	4.82	3.17	3.73	3.93	2.56	3.19
	韓国	3.55	4.01	3.64	4.35	2.82	3.14
	平均	3.80	3.55	3.80	4.10	2.65	3.13
	F値	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊	－

（高得点ほど所謂「日本的」傾向）＊＊P＜0.01　＊P＜0.05

3）日本とドイツの大学生によるスポーツ価値意識に関する比較

この調査は，1985年12月，日本は九州地区の国・公・私立の大学生，男子278名，女子188名の合計466名を対象に実施され，有効回収率93.2%であった。一方西ドイツ学生の調査は，ニーダーザクセン州のオルデンブルク大学生，男子130名，女子61名の合計191名の有効回答がえられ，有効回収率38.2%であった。[10)]

前記においては，日本・韓国ジュニアのトップレベルの比較から日本的スポーツの特性の考察を試みたが，日本・韓国・中国ではかなりの類似の集団主義がみられると考えられ，「日本的集団主義」も「東アジア型」の一変種として

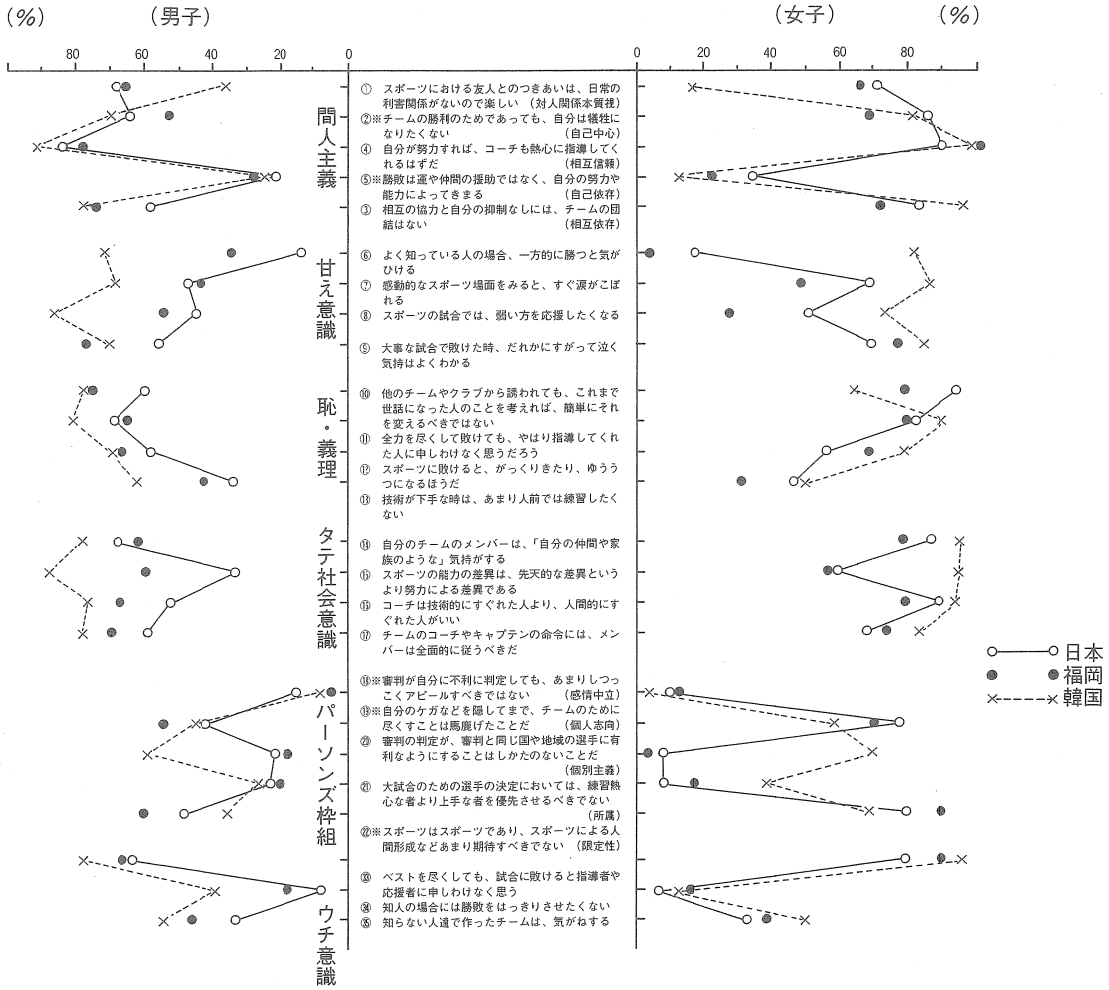

図2　スポーツにおける日本的価値意識
（%は「非常に賛成」と「やや賛成」の合計
ただし、※は「非常に反対」と「やや反対」の合計）

みられるとも言えよう[11]。このため，その文化圏を明らかに異にすると考えられる西ドイツをとりあげ，日本・西ドイツ学生の比較からスポーツ場面にみられる日本的価値意識の特性の考察を試みようとしたものである。

〈結果の概略〉

（1）スポーツ実施状況と対人関係

まず，スポーツの仲間についてみたのが表6である。日本の学生はほとんど「学校の友人」・「学校のクラブ仲間」であるのに対し，西ドイツ学生のそれは，「学校の友人」・「学校のクラブ仲間」・「地域のクラブ仲間」・「一般の友人」と多岐に分かれており，西ドイツ学生のスポーツ活動の組織や基盤が多様であるのに対し，日本学生のスポーツ活動の閉鎖性と，地域クラブの未組織性・不連続性を挙げることができる。また表7のスポーツを行う場所についても，日本は学校中心であるのに対し，西ドイツは学校・公園・広場・野外施設と極めて多様であり，前記のことが裏づけられる。

表6 スポーツする時の仲間 (%)

項目		1 家族	2 学校の友人	3 学校のクラブ仲間	4 地域のクラブ仲間	5 一般の友人	6 施設の仲間	7 一人で行う	8 その他	9 D・K
男子	日本 N=227	1.8	53.3	22.5	0.4	12.3	0.4	6.6	1.8	0.9
	西独 N=118	—	16.1	6.8	20.3	16.9	9.3	14.4	11.9	4.2
女子	日本 N=149	1.3	49.7	36.2	0.7	9.4	—	1.3	—	1.3
	西独 N= 56	3.6	26.8	5.4	10.7	21.4	10.7	8.7	10.7	1.8

P＜0.01

表7 スポーツを行う場所 (%)

項目		1 学校施設	2 地域の公共施設	3 民間の施設	4 公園・広場	5 施設野外活動の	6 その他	7 D・K
男子	日本 N=227	57.3	15.4	6.6	12.8	0.9	6.2	0.9
	西独 N=118	28.8	6.8	5.1	25.4	30.5	1.7	1.7
女子	日本 N=149	69.1	12.1	1.3	9.4	2.0	4.0	2.0
	西独 N=56	32.1	8.9	14.3	23.2	21.4	—	—

P＜0.01

表8 日本と西独におけるスポーツ観の項目別平均値と標準偏差の比較

項目	日本 平均	日本 SD	西独 平均	西独 SD	T検定
1.スポーツにおける友人とのつきあいは，利害関係がないので楽しい。	2.20	.91	2.87	1.31	＊＊
②.チームの勝利のためでも，自分は犠牲になりたくない。	2.73	.99	3.22	1.33	＊＊
3.相互の協力と自分の抑制なしには，チームの団結はない。	1.93	.89	1.95	1.06	—
4.自分が努力すれば，コーチも熱心に指導してくれるはずだ。	1.99	.89	2.71	1.26	＊＊
⑤.勝敗は運や仲間の援助でなく，自分の努力や能力によってきまる。	2.86	1.12	3.17	1.30	＊＊
6.よく知っている人の場合，一方的に勝つと気がひける。	2.79	1.02	3.38	1.31	＊＊
7.感動的なスポーツ場面をみると，すぐ涙がこぼれる。	2.71	1.05	4.41	1.01	＊＊
8.スポーツの試合では，弱い方を応援したくなる。	2.45	.94	2.81	1.30	＊＊
9.大事な試合で負けたとき，誰かにとりすがり泣く気持はよくわかる。	2.27	1.05	2.82	1.33	＊＊
10.これまで世話になった人のことを考えれば，チームを変わるべきでない。	2.43	.91	3.08	1.21	＊＊
11.全力を尽くして負けても，やはり指導者に対して申し訳なく思う。	2.53	1.04	4.18	1.09	＊＊
12.スポーツに負けると，がっくりきたり，ゆううつになるほうだ。	2.58	.99	4.02	1.05	＊＊
13.技術が下手な時は，あまり人前で練習したくない。	2.63	1.08	3.93	1.24	＊＊
14.自分のチームのメンバーは「自分の仲間や家族のような」気持がする。	2.50	.90	3.38	1.28	＊＊
15.スポーツの能力の差異は先天的な差異というより努力による差異である。	2.79	1.00	3.06	1.12	＊＊
16.コーチは技術的に優れた人より，人間的に優れた人がいい。	2.07	.88	3.26	1.25	＊＊
17.コーチ・キャプテンの命令には，メンバーは全面的に従うべきだ。	2.96	1.01	4.11	1.05	＊＊
⑱.審判が自分に不利に判定しても，しつっこくアピールすべきでない。	3.70	.98	2.91	1.26	＊＊
19.自分のケガなどを隠してまで，チームに尽くすことは馬鹿げたことだ。	3.36	.94	1.53	1.08	＊＊
20.審判の判定が審判と同じ国の選手に有利となるのはしかたがない。	3.97	1.05	3.20	1.22	＊＊
21.大試合の選手決定は，練習熱心者より上手な者を優先すべきでない。	3.07	.93	3.01	1.23	—
㉒.スポーツによる人間形成などあまり期待すべきでない。	2.07	.90	1.91	1.08	—
23.スポーツで苦しい場面を乗り越えるのは，体力・技術より精神力だ。	1.79	.86	2.90	1.17	＊＊
24.スポーツで得た体験は，必ず日常生活にも役立つだろう。	1.88	.83	2.00	.99	—
㉕.他人が働いている時にスポーツをすると何となくうしろめたい。	2.71	.92	1.48	.97	＊＊
26.金銭を目的とするプロ・スポーツは真のスポーツではない。	3.30	1.04	2.75	1.47	＊＊
27.スポーツの目的は健康・体力よりも，活動自体を楽しむことにある。	2.41	.90	3.03	1.24	＊＊
28.フェアにプレイしないかぎり，勝っても無意味である。	1.88	.99	1.84	1.12	—
29.スポーツ技術の向上のためには，きちんと指導を受けたいと思う。	1.89	.84	1.89	1.14	—
30.テニスの試合は，やはりテニス・ウェアを着てプレイすべきだ。	2.97	1.08	4.15	1.18	＊＊
㉛.オリンピックでの国歌演奏や国旗掲揚は中止すべきだ。	2.56	.97	3.75	1.38	＊＊
32.自分の国の選手がメダルをとると，国民として誇りにかんずる。	2.16	.93	4.13	1.14	＊＊
33.ベストを尽くしても，負けると指導者や応援者に申し訳なく思う。	2.49	.96	4.11	1.08	＊＊
34.知人の場合には勝敗をはっきりさせたくない。	3.32	.99	3.24	1.22	—
35.知らない人達で作ったチームでは，気がひける。	2.61	.96	2.76	1.18	—
36.フェアでないといわれても勝たなければ無意味である。	3.77	1.09	4.02	1.19	＊
37.負けてもベストを尽くせばよい。	2.06	1.02	1.74	1.03	＊＊
38.勝っても全力を尽くさなければ無意味である。	2.32	1.07	3.48	1.13	＊＊
39.アマチュアは絶対に金をとってはいけない。	2.84	1.09	3.37	1.22	＊＊
㊵.プロがいれば，オリンピックはもっとおもしろくなる。	2.89	1.18	2.56	1.39	＊＊

（注） 平均値が少ないほど各項目に対して肯定的である。ただし項目番号の②，⑤など○印は得点を逆転化したものである。
（注） 項目別に平均値のT—検定の結果，＊＊はP＜0.01，＊はP＜0.05となり，—は認められなかった。

（2）日本・西ドイツ学生のスポーツにおける価値意識

表8は，日本的価値意識を示す項目に対する平均点を日本と西ドイツについて比較したものである。平均値が低いほど各項目に対して肯定的である（ただし，項目番号　2，5など○印の項目は得点を逆転化したものである）。日本的価値意識を示すほとんどの項目において，日本の方が西ドイツより高いが，2・4の「間人主義」，6・7の「甘えの心理」，11・13・14の「タテ社会意識」，23「精神主義」，32「国家主義」，33「和によるウチ意識」等々において，特に日本の方が高い。一方西ドイツは，パーソンズのパターン変数によって構成された18「感情性」，19「個人主義」，20「個別主義」，21「業績主義」に関する項目の得点がやや高い。

4）3種類の調査による課題

すでに，1）で述べた「日本的『和』の特性の調査」にみられるように，上下関係・家族的一体感などの「間人主義」に基づく肯定率の高さから，日本のスポーツ集団は「和」の要素が強いと暫定的に言えるかもしれない。しかし，2）で述べた「日本・韓国ジュニア・スポーツ選手の意識・行動に関する比較」によると，そのことは必ずしも日本的特殊性に基づくものではない，とみることもできよう。つまり，その面では韓国の方が日本より日本的なのである。一方3）で述べた「日本とドイツの大学生によるスポーツ価値意識に関する比較」によると，日本的価値意識は西ドイツより日本の方が著しく，特に日本は「間人主義的」・「間柄主義的」である。

このように，日本のスポーツ集団，日本人論・日本的特殊性論で指摘される日本的スポーツの特性をかなり如実に表しているが，それは必ずしも日本のみの特殊的なものではない。確かにこれまで，日本的傾向をよしとするゆえ，日本的文化のパターンが定着したと言えようが，それをもって，日本のみが特殊な価値感を持つとみなすことは危険である。

次に，従来みられた上記のような対人関係重視の間人主義型タイプに対し，今日，新たに指摘されつつある対人関係重視に捉われないタイプへの対応について，スポーツ・リーダーはいかに配慮すべきかという問題に関して若干の考察を試みてみたい。

4　日本的リーダーシップの課題に関する若干の考察

日本的対人関係の特殊性についてはすでに指摘した通りである。次に，スポーツ集団の一般的対人関係と前記の日本的対人関係（特に間人主義の立場）をクロスすることによって，今日のスポーツ集団に問われている意味を考えてみたい。

スポーツ集団の雰囲気・規範・役割・役割期待・状況等々や，リーダーとメンバーの信頼関係・対人関係の如何によって，それらの記号化過程は極めて多義的なものとなってくる。特にそれは，発信者のメッセージと受信者の媒体過程において，必ず雑音（ノイズ）が入ることにあるが，このノイズに関連するのが日本的「和」である。つまり，「和」を中心とする間人主義的な対人関係においては，それを前提にして，部員相互・部員と指導者間のコミュニケーションがなされる。

たとえば，科学的体力トレーニング・科学的戦術・技術論も，「和」の媒体を通して，科学的とは楽にできる練習と合理化されたり，またリーダーからの情報は，「和」の媒体を通すことにより，部員がリーダーの心情を慮ってやってくれるという期待の下にマニュアル化されず，具体的なものに結びつきにくく，結果的には個人の資質を無視した「みんな一斉・同一量」の練習に陥ってしまうという，等々の事例が指摘される。

ところで，第1節でも述べたように，個人の行為は主体的社会関係と客体的社会関係の相互作用の結果として存在する。間人主義的対人関係重視の日本的価値観は，後者の客体的社会関係の遂行にとって便利であり，強化するものである，とみることができよう。

この媒体としての機能をもつ間人主義や間柄主義は，日本文化のパターンとの関連で過大視されてきた面もあるが，それらを今日スポーツ集団に問われている問題―(1)新中間大衆，(2)私秘化―との関連から新たに捉え直してみることも重要であろう[12]。

つまり，今日の間人主義・間柄主義的価値意識は，「豊かな社会」のもたらした「個別化」・「即自化」の動向とともに社会の中間部分に肥大化した「新中間大衆」の動向の問題とも密接に関わっている。今日みられるスポーツ集団と「個別化」（スポーツの楽しみ志向・競技志向・全力志向・健康志向）や「即自化」との緊張関係は，旧来の「運動部の伝統」へ引き寄せる媒介として，間人主義・間柄主義を機能させるものであるかもしれない。しかし，このような

動向は恐らく一時的なものであり，機能も極めて限定的であると考えられる。こうしたことを踏まえると，間人主義・間柄主義の新たな意味としては，客体的社会関係におけるスポーツ集団の発展の１つの媒介として，スポーツ集団における協同団体主義の形成とその意味の重要性を示唆するものとみることもできよう。

上記の点に関連して，一般に日本は集団主義的でありスポーツ手段視，欧米は個人主義的でありスポーツ目的視としばしば言われるが，しかしながら，このような２項対立論では，徒らに日本のスポーツの後進性を嘆くことに終始するのみである。もとより，日本的集団主義には，教育的効果，連帯責任制による不良防止効果等の機能があり，また先輩―後輩の関係は集団維持において機能するだろう。しかしながら，それはあくまでも限定的である。

そして一方，ここで指摘すべき最も重要な点は，いかなる社会においても，集団主義か個人主義かのいずれか一方によって説明されるものではないということである。それについて詳述する余裕はないが，図３のような４極構造による個人主義―集団主義を相対化したモデル[13]は，集団主義といわれる日本的スポーツの特性とその現代的変容を考えるための重要な視点を提示するものであると考えられる。

次に「私秘化」の傾向から今日のスポーツ集団をみると，同じ釜の飯を食うという「家族的一体感」が急激に失われつつあり，同時にそれらの特質も根本的に変質しつつある。つまり，より小さい単位の私生活に充足価値が見い出され，一層重視される傾向にあり，いわゆる「私秘化」傾向の顕在化が顕著である。それはある意味では，新しいスポーツ様式への模索でもあり，競技型スポーツそのものの基盤をも崩して行くことにもなる。また，それは，運動集団の人間関係を根本的に考え直してみる必要性を示唆するとも言えよう。

そもそも，クラブは，その特性の１つとして，私秘性を内蔵するのだが，同時に公共性をももちあわせている。この点からも，現代の日本のスポーツ集団においては，「和」を重視したスポーツ指導理念やスポーツ集団の在り方は，限定的に機能することはあっても，現代的スポーツ集団の発展の基本的要因として機能することはあまり期待されない。

スポーツ集団における日本的価値意識を再検討する意味は，日本の運動部にとって，「和」の精神がその活力の源泉となっているとみる局面から一歩出て，「限定的機能性」の意味を明らかにすべきであることを自覚することにあるといえるであろう。したがって，問題はその「限定的機能性」

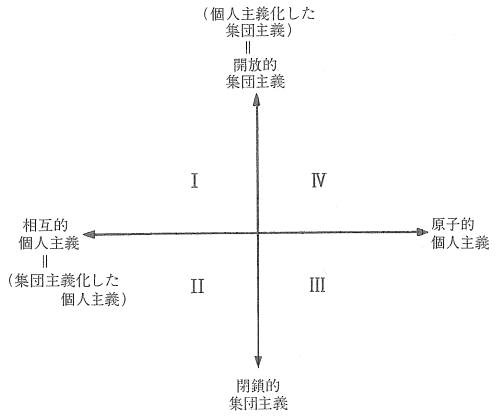

図３ 個人主義と集団主義の４極構造[13]

をどのように位置づけるかにある。この点については，すでに述べたように，間人主義・間柄主義が新中間大衆をネオ・ナショナリズムへと媒介する可能性，競技型スポーツの崩壊をおしとどめる可能性，あるいは日本の学校運動部が転機の中でなお持続する可能性等が考えられる。人間のモデルを「自立的な行動主体としての“個人”が，社会の構成要因であるとともに，分析の基本単位だとされる。……そうした唯我的な主体性の保持者ではなく，既知の人との有機的な連関を常に保とうとする関与的主体の持ち主，すなわち“間人（かんじん）”であろう。それは，人間関係の中で初めて自分というものを意識し，間柄を自己の一部と考えるような存在である。人間（じんかん）における人間（にんげん）と言えようか」[14]とみる立場が間人主義と呼ばれるものである。「和」の重視を含む，これらの日本的価値意識の機能には一定の限定性があると言えようが，一方主体的社会関係と客体的社会関係の両面に作用するコミュニケーションの媒体としての機能を果たす可能性を期待できよう。それは「しごき」や「根性主義」に代表される日本的運動部への回帰を意味するものでは決してない。投資の「量」としての「上―下級生」から，投資の「質」としての役割地位（たとえば，上級生をパートリーダーとして活用するリーダーの複数化）への変換が必要である。人は鏡に己を映して，はじめて自分自身がわかるように，リーダーはフォロアーの反応をみて，はじめてリーダーとしての自分を知る。成員間の価値意識は常に変化しているから，ミーティングを重ね，リーダーへの要求をリーダー自身が常に把握していかなければ，成員とのコミュニケー

ションは不可能となる。

国際比較調査の結果もふまえて，以上のことから次のようなことが言えよう。

（1）日本的「和」を尊重する価値意識は確かに存在し，それは，中学・高校・大学の運動部活動を通じて育くまれている。したがって，このような「間人主義的」な「縁約的」社会関係による対人関係重視の傾向は今後も継続するであろう。

（2）しかし一方，韓国との比較調査結果は，韓国の方がより「日本らしさ」を示している。それは，「豊かな社会」における「私秘化」・「個別化」・「即自化」等の動向にともなう「新中間層」の肥大化を意味している。したがって，(1)において指摘された傾向も，自ずから限定的なものである。このような日本的価値意識の機能的限定性をどのように位置づけるかが今後の課題である。*

（3）西ドイツとの比較調査結果では，日本的価値意識を示すほとんどの項目において日本の方が得点が高かったが，傾向としてとらえると，両国共通の部分もあった。つまり，日本的価値意識は確かに存在するが，それを日本だけの独自なものであるとか，特殊なものであると強調するのは誤りであることを示している。グローバルな視野に立って，常に変化していく日本のスポーツ状況を見据えて，スポーツに対して，参加者がどのような価値意識をもっているのかを捉えていくことが大切である。参加者のスポーツに対する価値意識を把握し，そのニーズに応えるようにプログラムを工夫し，リーダーを養成していくことが必要であろう。

*表5・図2による「スポーツにおける日本的価値意識」にみられるように，各個人の価値意識としては日本より韓国の方が「日本的」であるが，表3－1・2・3にみられるように具体的な「練習内容の諸特性」による場面では，韓国より日本の方が「日本的」な特性（「全員練習」・「伝統的練習」等）を示している。この矛盾は，日本におけるスポーツの「指導法」および「指導システム」がかなり遅れていることを物語っているのではないだろうか。

註および引用文献

1） 浜口恵俊：間人主義の社会　日本，東洋経済新報社，1982，p. 25.（浜口恵俊は「契約の原理」について，F.L.K.シュー説，佐藤慶幸説に従って，個人主義文化における社会関係の締結の原理を「契約の原理」と呼ぶ。）

2） 集団の機能的要件の充足については，富永健一（社会学原理，岩波書店，1986，pp. 162-66）による。

3） 浜口恵俊：前掲書 1），pp. 29-31.

4） 三隅二不二：リーダーシップの科学，講談社，1986，p. 70.

5）多々納秀雄・鬼塚幸一・徳永幹雄：スポーツ行動における行動特性と態度・価値パターンに関する国際比較研究，昭和58年度科学研究費補助金研究成果報告書，pp. 14-15（1984).

6） 杉本良夫・Ross Mouer：日本人は「日本的」か，東洋経済新報社，1982，pp. 147-54.

7） この調査結果は，荒井貞光代表，小谷寛二他：スポーツ集団の一般理論に関する基礎的総合研究，昭和58・59・60年度科学研究費補助金研究成果報告書（1986).

8） 浜口恵俊：前掲書 1），pp. 162-86.

9） 多々納秀雄・小谷寛二・鬼塚幸一：スポーツ活動と意識に関する国際比較調査(2)―日本・韓国ジュニア代表選手の調査―，日本体育学会第37回大会発表資料（1986).

10） 鬼塚幸一・小谷寛二・多々納秀雄他：スポーツ活動の実態と意識に関する国際比較調査(3)―日本・西ドイツの大学生の調査―，日本体育学会第37回大会発表資料（1986).

11） 古城利明：世界社会論的視座と日本社会，社会学評論，37-3，p. 29（1986).

12） ここでの「新中間大衆」・「私秘化」と「日本らしさ」における限定的機能の意味は，古城利明（前掲書11)，pp. 30-34.）によった。

13） 西部　邁：文明比較の構造，経済評論，30-10，pp. 11-12（1981).

14） 浜口恵俊：前掲書 1），pp. 5-6.